

---

# 近衛の息子

素浪人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

近衛の息子

### 【Nコード】

N8392X

### 【作者名】

素浪人

### 【あらすじ】

近衛詠春の息子として生を受けた男。

彼は家族の為に関西呪術協会で力を付けていく。

## 決意という導入部

昨日の話した。

俺は庭で一人ボール遊びをしている所に母さんが来たので、急いでボールを拾って駆け寄った。

母さんは大分前からお腹が大きくなり、もうすぐ俺の妹が生まれるらしい。

母さんのお腹に耳を当てて赤ちゃんが動く音を聞いていると、母さんは言った。

「ねえ水葉。木乃香が生まれたらあなたはお兄ちゃんになるわ。

だから、木乃香のこと、ちゃんと守ってあげてね。」

「えー、そんなのめんどくさいよー。」

「ふふ、だめよ。お兄ちゃんなんだから。お兄ちゃんは妹の事を守ってあげないと。」

「分かったよ。木乃香は俺が守るよ。」

「うふふ、ありがとう水葉。それと、お父さんの事も良く見てあげてね。

あの人はずぐ無茶ばかりしちゃうから。」

「分かった!」

その後すぐ、陣痛が始まり木乃香が生まれた。だがその代償として、母さんが居なくなった。

母さん、……父さんと木乃香は俺が守るよ。だから安心して天国で見守ってて。

刹那がやってきた。

目が覚めて一番初めに気がつくのはすずめが鳴いていることだった。その事に、ああ朝だ。と思い、バツと布団を自ら剥ぐ。

既に着慣れた着物に袖を通し、身支度を整えると、まずは洗面所に行き顔を洗った。

冷たい水で目覚ましをした後は、大好きな兄さまの下へと急ぐ。

「兄さま」

どろろんと音がしてベットが微妙に軋むがお構いなし。木乃香はそのまま兄さまの寝ているベットにダイブした。

「ぐほあ！」

兄さまが苦しそうに呻いた。

「こ、木乃香あゝ。朝からこれはちょっと辛いぞ」

「えへへ、おはよう兄さま」

兄さまはそういいながらもその手でやさしく頭を撫でてくれる。そんな兄さまに嬉しさを隠せず抱きついてしまうのも仕方のない事なのだ。

兄さまが洗面所で顔を洗い終わるのを待ってから、二人で庭に出る。

「さて何時も通りやるか。」

「うん！」

そついうと、兄さまの部屋から持ってきたラジカセのスイッチを押す。

腕を前から上げて背伸びの運動

ラジオ体操が始まった。

「ふう、お疲れ様、さあみんな、今日も一日頑張ろう！」

「はい！」

ガチャッと停止ボタンを押しながら兄さまは屋敷のお手伝いさんたちと言った。

その言葉を受け、お手伝いさんたちは各々の仕事とに戻った。

このラジオ体操は兄さまが自主的に始めたもので、初めは兄さま一人で毎朝やっていたのが、私も私もお手伝いさんが参加し始め、いつの間にか屋敷の者全員が一緒になって行っていたそうだ。

兄さまはこれを、「結束が深まっていいな」と言っていた。結束ってなんだろう？

「お疲れ様です。水葉、木乃香」

「父さん。おはよう」

「父さま。おはよう」

「おはよう、二人とも。今日も元気があってよいことです」

片づけをしている私たちの前に来て、父さまが話しかけてきた。

父さまはいつも忙しい人だ。

実は父さまは偉い人らしく、いつも部屋に籠もってお仕事ばかりしている。

全然構ってくれないので、寂しくていつも泣いていたが、兄さまが言った「僕はずっとお前のそばにいるから、父さんの分もずっとお前のそばにいるから泣かないでくれ」という言葉で私は泣き止んだ。例えば父さまがいなくても、私には兄さまがいる。兄さまは約束を破らない。現に兄さまは寝る時と学校に行っている時意外は常に私の傍に居て一緒に遊んでくれた。そんな兄さまが私は大好きだった。

「さて、木乃香。実は君に良い知らせがあるんだ。」

「えゝほんまに？ なんやろなゝ」

「うん、ちょうど来たようだからね。……おーい刹那君、こっちへおいで」

父さまが呼びかける方を兄さまと二人で見ると黒い髪の女の子がこっちを見ていた。

「およ、誰だあの子？」

「はじめてみる子や」。お友達になれへんかな」

同年くらいの子に見えた。そんでちょっと寂しそうな目をしているのが気になった。

鳥族の村から、追ひ払われるように逃げてきた私は近衛詠春という男の人に拾われた。

夜も更けていたので、詠春さんに言われるがまま屋敷で一日を過ごし、

翌日、呼ばれて庭に出てみると私と同年くらいの女の子と少し上だと思ふ男の子が居た。

「おい、こつちにおいで。」

同年くらいの子で私に積極的に話しかけてくれる人なんて居なかった。

だからだろう。嬉しくなつて全力なのであの子達の元へ掛けていった。

「うん！ 今行く！」

鳥族の村に禁忌の白翼を持つ子供が生まれ、追ひ出されたという話を聞き、私はその子を保護するために探す事にした。

程なくして見つかったのはまだ木乃香くらいの子だった。  
とりあえず、保護しうちで養う事にした。まずはうちの子たちに会  
わせてみようと思う。

ちなみにお願ひして見せてもらった白い翼はとてもきれいだった。

今日、木乃香に新しい友達が出来た。

名前は桜崎刹那。もう親もいなくてうちにいるしかないらしい。そ  
れなら……。

「ねえ父さん。刹那ってもう親も兄弟も居ないんでしょ？」

「水葉！、それを彼女の前では言っではいけませんよ！？」

夜、いまだ仕事をしている私のところに突然水葉がやってきた。ど  
うやら刹那くんについて聞きたいらしい。

「分かったよ、で？ どうなの？」

「……はあ、そうですよ。彼女は天涯孤独の身です」

「なら父さん、刹那をうちの子にしようよー！」



「な！ 刹那くんをですか！？」

考えても見なかった事を言われ、驚いていると、水葉が話し始めた。

「そうだよ！ 刹那つてずっとうちに居るんでしょ？ それで親も兄弟も居ないたった一人の桜崎はきつと辛いよ。苗字だけで他人になっちゃうよ。それじゃあかわいそうだ！」

そうか、水葉は一人である刹那くんに同情しましたか。

思えば、昔から水葉は家族を大事にする子でした。

私と木乃香、二人の距離が離れないように、時折木乃香を連れて私の仕事場に来て遊びながら私のことを心配そうに見ていましたね。

そんな水葉だからこそ、家族が居ない刹那くんが気になったんですよ。

孤児はそこまで珍しくありません……ですが、これも何かの縁でしょう。

「……………そうですね。……………水葉」

「なに？」

「あなたは彼女にお兄さんとして接してあげられますか？」

「……………もちろんだよ！ 刹那も木乃香みたいにする！」

「そうですか、分かりました。後ほど刹那さんの意思を聞いて近衛家の養子に迎え入れましょう。」

「わーい！ やったー。家族が増えるぞー！」

喜ぶ水葉を見て、私も思わず笑みを浮かべました。  
本当にいい子に育ってくれました。

木乃葉さん。私たちの子供たちは元気に、そしてやさしい子に育っていますよ。

裏について学びました。刹那が青山の家に行きました。

あれから刹那は近衛家の養子となり、近衛刹那となった。

もちろん、近衛家に入る事で多方面から反発があつたが、親に捨てられて孤児になったこと、剣術の才能という将来性を持つてそれらを父さんがねじ伏せ、刹那は晴れて俺たちの家族になった。

一応年齢と誕生日を聞いてみた所、木乃香より2ヶ月年上という事で近衛家長女になってしまった。

お姉さんになったという事で、本人は少々やり難そうな顔をしていたが、

一月も経てば木乃香の世話をする立派なお姉さんとなっていた。(

本人談)

まあ俺から言わせればどっちも大して変わらないけどね。

と、いうわけで、今日もいつも通り3人で遊んでいる。

刹那は何気に神鳴流という剣術を学んでいるらしい。そのため、朝体操を行った後は即車で移動という地味にVIP待遇だった。さすがは近衛の娘だ。

その間俺たちとはというと、3人で遊ぶ事に慣れてしまったため、刹那がいらない間なんだか暇になってしまった。二人で遊んでもなんだか盛り上がりがないし、何か無いかと父さんに尋ねたら刹那と一緒に剣術をしないかと言って来た。

言い方からして俺にだけ言ってるようだが、正直そんな重いもの持つて振り回せるとは思えない。

山暮らして体力の方は自信はあるが、どうもそういった事柄には興

味を持てなくて、以前刹那の持っていた刀を持たせてもらったが、重くて持てないほどだった。もちろん木乃香もだ。

そんなわけで父さんの提案は却下。

そもそも俺が剣術ならうちやったら昼間木乃香一人になっちゃうでしよって怒っておいた。

父さんも、そうでしたね迂闊でした。申し訳ありません。と謝ってきた。今回だけだよ。と許してあげたら苦笑いしてた。

結局の所やることがないという事で、庭で木乃香と二人どうしよつかーと首を捻っていたら、父さんが来て、今日の夜、刹那も含めて3人に大事なお話がありますと言って来た。

夜。俺たち3人で、父さんの部屋に行った。

部屋には父さんの他に、よく刹那と話をしている鶴子姉さんも一緒に居た。

なんだかまじめな顔をしているので、何かしちゃったか心配になったけど、どうやら違うみたいだった。

父さんが、俺と木乃香を見て、二人には秘密にしていた事があります。と語り始めた。

……………要するに、この世には魔法のような力が存在していると。

呪文を唱えると、不思議現象を起こす事が出来て、すごいと。

うちは関西呪術協会という組織で、関西で一番大きい組織で、陰陽師がいっぱい居ると。

そうだった話だった。

ちなみに刹那は既にこの話を知っていた。

よくよく考えればそういうこともあるかもしれないなあと思った。  
なんせ刹那羽生えてるし。

さらに話を聞くと、木乃香はとんでもない魔力を秘めていてやばいらしい。

次期関西呪術協会の長として期待されてるらしい……俺は？

俺も木乃香ほどではないが、関西呪術協会の中ではNo.2の魔力を持ってるらしい。やばい。

最後に俺と木乃香に陰陽師になんない？ということでした。

ちなみに鶴子姉さんが隣に居たのは神鳴流の重鎮で、この関西呪術協会にも大きな影響力を持っているかららしい。姉さんは刹那を直弟子として育てたいと言っていて、そのためにはこの屋敷から出て一時青山の家で朝昼晩と一日中修行に当てたいらしい。なんか合宿みたいだ。

刹那自身、その話には乗り気だが木乃香の事が心配らしい。だから将来のためだ、頑張つて来い！ 木乃香の事は俺に任せろ。頼れる女になつて帰つて来いよ！と言っておいた。

刹那は、おおきに兄さん、木乃香を頼むで。と泣きながら言った。

俺も木乃香も泣いた。

んで父さんが期待してるのは、俺たち子供、Sで刹那を前衛に、俺が中衛、木乃香を後衛という形のフォーメーションでチームを組むことらしい。正直面白そうだと思うた。

俺が立ち上がって、がんばるぞー！と右手を上げたら刹那と木乃香

もぉー！と言って手を上げた。

これで一つ夢が出来た。実現するために頑張るぞーと言ったら、では明日から二人とも頑張ريましようねと父さんに言われた。うん。頑張るぞ！

「ちなみに水葉は前衛後衛どちらでも動けるように、私と体術の訓練を行いますからそのつもりで」  
ええー、聞いてないよー。

友人も出来ました。(前書き)

設定は適当です。

友人も出来ました。

開催呪術協会の総本山である”カガヒコノヤシロ？毘古社”は人里から離れた場所にあり、基本的に移動はバスを使って行う。そのため、幼稚園には行かず、総本山にて幼児教育を受けていた子供たちは小学校から集団教育を受ける事になる。

「では、行つて来るよ。」

「行つてらっしゃい。」

長い長い階段を降り、用意された車に乗り何時も通り学校へ向かう。

「じゃあ、山本さん、何時もの場所までお願いします。」

「かしこまりました。」

移動中も陰陽道の基礎の本を読んで勉強する。これはま木乃香や刹那とは違い、小学生のため修行の時間が限られる事もあって、僅かな時間も惜しんで勉強しろとの先生の教えから来ている。

「あゝ分かないわあ」

「精が出ますね坊ちゃん。」

「坊ちゃんは止めてよ」



「ははは。」

山本さんは何時も坊ちゃんと俺を呼んでくる。本当にそんな柄じゃないから止めて欲しい。

「さて、着きましたよ坊ちゃん。」

「もう着いちゃったか、……………よし、山本さん。ありがと！」

読んでた本を車の中に置き、ランドセルを手に持って車を降りる。

「では夕方、ここでお待ちしております。行つてらっしゃいませ」

「行つてくる！」

山本さんに手を振って学校まで歩く。山本さんが近くまで送ってくれるため（校門まではさすがに目立つため、近辺までになっている）学校はすぐそこだ。

なのでのんびり学校まで歩いていると、

「おーい、水葉！」

「あれ、火水じゃん。」

近くのコンビニから友人が出てきたのは、入学以来の友人である八坂火水さかひみずだった。

「相変わらず朝早いよな、お前の姿を見つけたから店から出てきちゃったじゃん」

「そんなの知らないよ！」

「うへえ、冷たい冷たい。水葉さん冷たいよ」

「ほれ、良いから行くぞ。」

「へいへい」

軽口を叩いてくる火水のけつを叩いて先を進む。雑談をしながら登校すると教室に一番のりしたようだ。これもいつも通り。

「そつえば俺、最近神鳴流を始めたぜ。」

席に付いてランドセルを机の脇に引つ掛けてると火水が話し掛けてきた。

「うつそ、お前までやるの？ 追いつかれそうだ、怖い」

「ふっふっふ、すぐ追いついてやるからな」

火水は家の事情により裏に精通している。

火水の父親である八坂木土やさかきつちさんは本山にたまに来て依頼を受けていくので、そこら辺はこつちも良く知っている。

「よくよく考えると、きつちさん（小さい頃名前が呼べなくてこう呼んだ）、刀も持ってたな。」

きつちさん神鳴流使えるの？」

「ああ、オヤジは神鳴流も達人並だよ。よく詠春さんと一緒に練習してたらしいな」

「へえ、父さんときつちさんが！ 知らなかった」

「ふっふっふ、そうだろそうだろ、俺も昨日オヤジから初めて聞いた」

「なんだよそれ」

時間も時間になり、裏の事を知らないクラスメイトたちが入ってきた。これ以降はこの話は出来ない。

俺たちは話を切り替え、バカ話に興じるのであった。

「ではお嬢様、今見せた術を使ってみてくれますか？」

「はい。」

先生の指示に従って真言による妖怪召喚を行う。

「オン」

魔力を込めた真言を発する。

ボンッ！

「うっ！」

召喚の影響で砂埃が沸き立つ。

出てきたのは先ほど先生が召喚したぬいぐるみみたいなお猿さんやなく、きれいなお姉さんやった。

「おおよ？」

「召喚により馳せ参じました。私は茨木童子、ご命令を」

「ななな！……………」

先生も驚いてた。うちが間違えたからかな？ どないしよう。

「そうや！ お嬢様、前鬼・後鬼として契約してはどうや？」

「ええ！？ このきれいなお姉さんと？」

「私と契約を！？」

先生の言い方からして、お姉さんは妖怪なんかな？

……………むむむ。頑張ってみよう！

「ゴホン！ 茨木童子さん。うちと契約してくれまへんか？」

とりあえず、笑顔で聞いてみた。

「お断りします。私は誰とも契約するつもりはありません」

断られた。問答無用で断られた。

「先生、だめやて」

「んー。こんなすごい鬼さんを呼べることはもう無いかも知れへん。こつなったら、物量作戦や！ お嬢様、頑張つて説得しましょ。」

「了解です。たいちよー！」

びしつと敬礼してこれから頑張つて”説得”する鬼さんを見つめる。

「うつ！　だ、だめですからね。私は誰とも契約なんかしません！」

冷や汗を掻きながらぷいつと顔を背ける鬼さん。

「うつふつふ、最初は誰もがそう言うんや。大人しく私に”説得”されなはれ！！」

「お嬢様がんばー！」

両手をわきわきさせながら近づいてくる木乃香に怯えながら茨木童子は後ずさりする。

「い、いやあああ！！！！」

その日、関西呪術協会の総本山では女性の悲鳴が止まなかったという。



友人も出来ました。（後書き）

水葉は小学3年生に進学

木乃香は5歳。刹那も5歳です。

木乃香は陰陽術専門

刹那は神鳴流専門で学んでいます。

水葉は両方です。

ちなみに先生は千草先生です。

## 麻帆良に來いと言われたよ

木乃香と刹那が小学校に入学しようという2月の半ば頃に3人は父、詠春に呼び出された。

「いきなりお呼び立てして申し訳ありません。さっそく呼び出した経緯を説明しましょう。」

相手が自分の息子娘でも敬語を使う礼儀正しい父に苦笑をしてしまう。

そんな言い方せずにもっと親しい話し方をして欲しいのに。家族なんだから。

「昨日の話ですが、私の元にお義父さんから手紙が届きました。」

「おとうさん？ お祖父さんですか？」

父は”おとうさん”と言った。ならば自分たちにとっては祖父に当たる人物なのではないのか？

「ええ、木乃葉さん……あなたたちのお母さんのお父さんに当たる人ですね」

驚いた。そんな人物が居たとは聞いた事が無かった。

木乃香や刹那もこのことに驚いているようだった。

「貴方達には知らせていなかったと思いますが、実は居たのです。」



はあ、と答えるしかなかった。

本当に今更な話だった。俺たちの生活は充実しているし、今更祖父を名乗る人物が現れたとしてもだからどうしたと言う話だ。

「話を戻しますね。そのお祖父さんから手紙が届きました。内容はですね、木乃香、そして水葉。あなたたちに麻帆良に来てくれないかということでした。」

麻帆良。

麻帆良学園都市と言われる埼玉県に存在する学園都市。

協会や礼拝堂、コンビニなども内包し、巨大建造物が多く並んでいるらしい。

特筆すべきは湖の上に浮かんだ島、図書館島だろう。昔父さんから聞いた話によると地下が存在し、階を降りることに何故か強

力な罫が存在し、侵入者を拒むと言う。

そして麻帆良の象徴ともいえる巨大な木、世界樹の神木・蟠桃だろう。資料によると樹高は270mにまで達しているらしい。

さらに最新鋭の科学を持ち、超人的な実力を発揮する人間が多いらしい。

「……………ほんで、どないするんや父さま？」

「……………私はこの話を引き受けようと思います。」

「…っ！！ 父上！！」

父さんの話を聞いて刹那が激昂する。そりゃそうだ。今の話はあくまで木乃香と俺であって、

”刹那”ではなかった。

自分が呼ばれなかったこともそうだが、俺たちと引き剥がされるのにも納得がいかないだろう。

「落ち着け刹那。まだ話は終わってないぞ」

「……………はい。」

俺に言われてしぶしぶ引き下がる刹那。悪いな刹那、後で何か埋め合わせするよ。

「父さん、続きをお願いします。」

「……………ええ。私がこの話を受けようと思ったのは、木乃香、あなたの身がここに居ては危険だからです。」

「う、うちが？」

「ええ、あなたがその身に宿している極東随一の魔力。それは多くの人間から狙われる大変な代物です。まだ子供のあなたでは自身で守る事も出来ません。」

「でも、ここには兄さまや姉さまも居るし、父さまも居るやろ？ならここでええと思うんやけど……………」

「水葉も刹那もまだまだ子供です。私もいつもあなたたちの事を見ていられるとは限りませんし。」

……………麻帆良には護衛の方々もたくさん付けられますし。安心して過ごせるはずですよ……………一応養父さんも居ますし」

最後の言葉だけは掠れて聞こえた。

「……………うちは嫌や！ここに居る！姉さまとも兄さまとも、父さまとも別れとうない！！」

「……………木乃香、お願いします。ここではあなたを守りきれないのです。」

とりあえず、大体ネタは出尽くしたかな。要は俺たちを麻帆良という安全な場所で暮らさせたいと言う事だ。

あの、鳥籠の中ですか。

「父さん、今回の話だけど。」

「水葉、あなたも反対ですか？」

「もちろんだ。…………俺はもう小学3年生にもなるし大事な友人もいる。ここで学ぶ事も多いし何よりここじゃない場所に行ったら陰

陽術の勉強は明らかに滞るよ。」

「それに関してはこちらから麻帆良に許可を貰ってベテランを派遣するつもりです。」

話の運び方間違えた。俺たちはどうあっても麻帆良なんかに行くつもりは無い。

うまく流れを作って必ず断ってみせる。

「俺たちが麻帆良に言ったらさ、そのうち刹那も呼ぶんだろ？どうせ刹那は神鳴流をきっちり学ばせてから送る予定だろうし。」

「そ、そうなのですか父上？」

「はい。 中学に上がる頃には刹那も麻帆良に送ろうかと思っていました。」

当然だ。必ず刹那を送ってくるつもりだろうとは思ってた。

まあそもそも、なら初めから刹那もセットでいいだろうとは思っけど。

教師役をよこすんならついでに神鳴流の先生も遅れるだろう

……ああ、そういえば麻帆良には神鳴流の人間が居るって前に火水から聞いたな。

確か名前は葛葉刀子だったか？

「まあ、護衛役のように刹那を寄こすのも気に入らないけどね。それよりもさ、そうしたらここには父さんしか居なくなっちゃうよ？」

「そんな事はありません。ここで働いている方々が居ます」「そうじゃないよ！」――！

この人は分かっている。

こんな事で家族をばらばらにされるなんて許さない。

「なあ父さん、もっと俺たちのこと信頼してよ。俺たちは家族だよ。俺たち4人なら木乃香も守れる。絶対守れるよ」

「水葉……………」

「それに、さ、母さんから頼まれてるんだ」

「木乃葉さんから!？」

「うん。お父さんの事も良く見てあげてね。あの人はすぐ無茶ばかりしちゃうからって言ってたよ。」

「だから俺は麻帆良に行けないし木乃香も守らないといけないので当然木乃香も行けない。」

「木乃葉さんがそんな事を、だから……………」

「父さんは俺の言葉に衝撃を受けているようだ。」

「お願いや父さま、うち麻帆良には行きとつない!」

「お願いします父上!」

「父さん!」

「一気に攻勢に出る。ここで押し切れなきゃ俺たちは麻帆良に連れてかれてしまう!」

「……………分かりました。麻帆良は中止します、養父さんには断りの連絡を入れておきましょう。」

「やったー! と俺たちははしゃぎ始めた。それを見ながら父さんはうれしそうに笑っていた。やっぱり父さんも寂しかったんだな。」

「思えば私からあなた達との時間はほとんど取れませんでしたね。今度、家族4人で旅行に行きましょうか。」

「ホント！」

「「ほんま!？」」

はしゃいでいた俺たちは父さまの所に駆け寄って抱きつく。

久しぶりの家族団らんだった。

「……………と言うわけで、今回の話は無かったという事でお願いします。」

「……仕方ないの。あい分かった。木乃香と水葉によろしく伝えておいてくれるかの」

「はい。必ず伝えます。それではまた」

「うむ。また、元気で」

「はい。失礼します。」

がちゃ。

電話を置き、一息つく。

結局木乃香と水葉をこちらに連れてくる事は叶わなかった。

さんざん京都にいる危険性を説いて脅しを掛けたがうまくいかなかったようだ。

「家族、かの」

先ほどの婿どのの話しには家族という単語が多く登場した。最初に連絡したときとは大違いだ。

「恐らくは、家族で話し合いでもして心変わりしたのかのお」

なにはともあれ、未来の優秀な従者候補が一人消えた形となった。

”彼”がこちらへ来るまでに揃える一クラス分の従者候補に一人欠員が出る。どうすべきか。

「まあ、一人といってもまだまだ人数は足らんがな。ふおふおふお。」

まだまだ時間はたっぷりある。焦らずゆっくり吟味していこう。

麻帆良に來いと言われたよ（後書き）

この話しでは麻帆良関連の話しが余り出ない予定です。



## お偉いさんの娘たちの悩み

あれから時は経ち、春になった。

そう、木乃香と刹那の小学校入学式だ！

俺と父さんはカメラ片手に入学式に潜入し、周りの迷惑も考えず、バシバシ写真を取りまくった。

「戦果はどうですか水葉？」

「ばっちりだよ、教室で名前を呼ばれた時もばっちり取った。ああ、現像が楽しみだ。」

「そうですね。私の木乃香成長日記と刹那成長日記に大いに華を添えられます。」

「俺は二人の写真を財布に入れてお守り代わりにしとくよ」

「それはいい案ですね。私もやりましょう!!」

大いに満足し、父さんと一緒に語らいながらその日は終わった。

数日後、木乃香と刹那が深刻な顔をして俺のところに来た。なんだろうっ？

「あんなあ、兄さま。どうもうち、学校で避けられてるみたいなんや」

「わたしもや兄さん。どないしよう」

詳しく話を聞くと、どうも、お偉いさんのご子息にご迷惑を掛けないようにと、関係者の両親たちが息子娘に言い含めているようだ。それを見て一般人の子供たちも釣られてよそよそしい態度を取ってしまう。

これは俺も経験がある。俺の場合は火水が居たからすぐクラスメイトたちとも仲良くなれた。

あいつは遠慮なんてしないからな。ずけずけ俺の内側に入り込んできてそれでも大丈夫だっことをクラス中に見せ付けて俺への信用を取ってきてくれた。口には恥ずかしくて出せないが本当に感謝している。

「そうだなあ、火水に相談してみようか。俺も似たような経験あるし。」

「兄さまもなんや。うち大丈夫やろか」

「大丈夫だつて。俺に任せとけ！」

「兄さん、うちの事も忘れんといてな！」

「忘れてないって刹那、大丈夫。刹那もきつとたくさん友達できるさ」

不安そうな二人だが、俺の自信満々な表情にすぐ安心して部屋に戻

っていった。

その日のうちに火水に電話をした。

「そっかー。木乃香ちゃんと刹那ちゃんがねえ。」

「俺のときはお前が助けてくれたから良かったけど、必ずしもお前みたいな奴が居るとは限らないし」

外に顔が広い火水なら何とかならないだろうか？

「ふむ、…………、ああ、そういえば二ノ宮の小豆ちゃんが小学校に入学したって聞いてるな。  
と言う事は同じ年か。」

「ほほう。その子に頼むのか？」

「…………、あ、だめだこの子、別の小学校だわ。まあ一応そのうち二人には紹介しとこうかね。陰陽師見習いだし。」

「うん頼むよ。それで他に居ないか？俺は外には伝手がほとんどないからさ。」

「本山に引きこもってたしな。幼稚園も来なかったし。まあそれはいいけど、

………… ちょっと時間頂戴、オヤジにも相談してみるわ。」

「了解！ きつちゃんによろしく言っておいてくれ。」

すぐにはやっぱり無理か。ちょっと時間を置いてみよう。  
二人には悪いがもう少し耐えてくれ。

「あいよ。…水葉、今度一緒に練習しようぜ！」

「あん？ ああいよ。うちに来てくれ、迎えは出すよ。」

「あいあい、じゃあなー。」

「またな」

受話器を置いて一息つく。

すぐには無理だったが、決して諦めるわけには行かない。……せめて二人の同期に連絡を取ればなあ。

悩んでいても一向に解決案が出ないので、仕方ないが今日は寝る事にする。翌日また火水と話し合いをしよう。

翌日、放課後に火水と話し合っていると、クラスメイトの一ノ瀬瑞穂が話しかけてきた。

「どうしたの？水葉くん。」

「ん？……………ああ瑞穂か、実は今年入学した妹がクラスに中々馴染めなくてな。兄として何とかしようとしているんだが」

「……………そう、それは大変ね。」

「んん？　　そういえば瑞穂には二つ年下の妹が居るって話だったような。」

「そっぴや瑞穂、お前今年入学の妹居たよな？」

先に火水に言われてしまった。

「え、ええ居るわよ？　……………ああ、そういうことね、良いわよ。私から清花に言っておくわ」

「ありがとう瑞穂。妹は木乃香と刹那と言っんだ。よろしく頼む。」

「近衛木乃香ちゃんと近衛刹那ちゃんね、分かったわ」

1年の頃からカッコいいと評判の女子である瑞穂ならすごく期待が持てる。本当にありがたい。

「本当に助かるよ。今度一緒にどこか遊びに行こう！」

「あら、デートのお誘いかしら？」

「ええ、デートなの！？　　3人で遊ぼうって話しじゃねえのかよおい！」

軽い気持ちでの誘いが色恋沙汰に発展していた。別にそういう事ではないんだけど…………。

「いや、3人で遊ぼうってことだよ。今度俺んちに誘うから二人とも来てくれ。」

「そうなの？ なあんだ。デートかと思って期待しちゃったわ。」

「なんだなんだ？ 二人は出来ているのか!？」

小学生特有の出来てる出来てないで言い合いが始まって今日の話し合いは終わった。

翌日の夕方、二人から友達が出来た事を伝えられた。

よかったねと言ったら。元気良く「うん!」と答えてご機嫌な様子で去っていった。

うまく行ってよかった。



## お偉いさんの娘たちの悩み（後書き）

話しは基本的に京都限定になるため、オリキャラだらけになる予定です。

木乃香や刹那は麻帆良組の代わりとなる友達をたくさん作ります。主人公達も一つ上の世代として木乃香たちを導いていきます。



忍者さんがやってきた。(前書き)

刹那の出番が取れない。

個人的にそうべらべら喋らないイメージがあるので、  
どうも回りに濃い人間が集まると途端存在感が薄まってしまつ。  
何とかせねば。

忍者さんがやってきた。

神鳴流では、その技を使う際に気という力を使う。

気は人間全てに存在する未知なる力で、場所によってはプラーナとかスピリットとか呼び名が変わるらしい。

これを使用する事によって超人的なことが出来るようになる。

例えば大きな岩を軽々持ち上げたり、自転車よりも早く走れたりもする。

そんなすごい気を使って神鳴流は技を繰り出します。

ある技では岩を一刀両断するほどの切れ味を出したり、遠くにあるものを切ったりする事が出来ます。

ちなみに雷を落とすなんて事も出来ます、………剣技なのかどうか未だにわかりませんが。

だが如何せん、神鳴流だけの修行では気の扱いに関して柔軟に考える事が出来なくなってしまう。

そこで関西呪術協会の長である近衛詠春は外部から神鳴流とは別の気を扱う者を護衛として雇い入れることにした。

雇う事にしたのは、かの有名な甲賀流の忍者。なるべく年が近く優秀な者を頼んでおいた。

やってきたのは男女の兄妹、さつそく会って話をしましたが、兄は実直、妹は天然といった感じで、それぞれ兄の方は水葉と、妹の方は木乃香、刹那と同年でした。

折角なので、一緒に学校にも通ってもらうように、付き添いの方に伝えましたが、良いとの返事をいただきました。学校代は甲賀側が持つそうです。どうも妹さんは勉強が苦手らしくこの際きっちり勉強させるらしいです。

何はともあれ、護衛ですがきつと仲のいい友達になってくれるでしょう。うちの息子をよろしくお願いします。

父さんが新しい護衛を雇ったそうだ。

名前は長瀬紅葉と長瀬楓。紅葉は俺と同じ学年で、楓は木乃香たちと同じ年だ。

護衛担当も同じになるらしい。

と言う報告を昨日受けたので、今日は本山に居る全ての人が集まり、顔合わせをしている。

代表として自分達が前に出て挨拶する。

「よろしくな紅葉くん、楓ちゃん」

「よろしゅうな、紅葉さん、楓ちゃん」

「よ、よろしくお願いします。」

若干刹那が緊張しているようだが二人は気にしていないという風に笑顔で挨拶を返してくれた。

「こちらこそよろしく。えっと君が水葉だね、それから君が木乃香

ちゃん。そして刹那ちゃんか」

「は、はい！」

木乃香と刹那が若干緊張した様子で返事をする。

「妹を紹介しよう、楓、挨拶をしなさい。」

「分かったでござる！」

「「「う、ござる！」「」」

事前に忍者とは聞いていたが、……まさかござる口調とは。生まれて初めて生で聞いた。

「何でござるかー？ なにかおかしい所でもあったでござるかー？」

「い、いやなんでもない。続けてくれ。」

楓ちゃんが心底不思議そうに首を傾げているので、とりあえず流して先を促した。

「では、コホン。拙者は長瀬楓と申すでござるよ。木乃香殿、刹那殿、そして水葉殿。今後ともよろしく頼むでござる。」

ペコつと一礼する楓ちゃん。里の方たちも皆こんな口調なのかなあ？ でも紅葉くんは別に普通だしな。

「聞いている通り、楓は天然です。一時期嵌った時代劇の口調をそのまま真似ているので、こんな口調だ。まあ余り気にしないで仲良く

してあげてください。」

紅葉もぺこっと一礼する。

「はいはい。挨拶はこれくらいでいいですね。それでは解散します。皆さん仕事に戻ってくださいね。」

父さんの号令でお手伝いさん含め全員解散する。

「紅葉さん、楓さん。うちの息子と娘たちをよろしくお願いします。」

「お任せ下さい。」

「で、じゃあ。」

二人は同時に頭を下げる。

「では私も仕事に戻ります。水葉、まずは二人に屋敷を案内してあげなさい。」

「はい。んじゃ行こうか。」

「分かった。」

案内も終了し、庭で5人集まっていた。

案内中、二人はしきりに間取りを持っていた地図と比較して確認していた。用心深い所が俺的に評価プラスだ。

「ねえねえ、楓ちゃんって忍者なんやってね。どんな忍術を使えるんや？」

「木乃香殿、拙者の事は楓と呼び捨てでお願いするでござるよ。」

「うーん、それだったらうちの事は”このちゃん”って呼んで！」

また始まったようだ。近頃木乃香は学校で皆にこう呼ばせているらしい。

呼んでくれないと意地でも呼ばせるらしい。お陰で木乃香は頑固者として有名になっている。

「むむむ、護衛対象をそんな風に呼ぶわけには……………」

「いいの！」このちゃん”って呼んで！」

「わ、分かりました。こ、このちゃん……………」

「わーい、”このちゃん”って呼んでくれた！」

あとは、姉さまの事は「せつちゃん」って呼んで」

「ええ！ 刹那殿ですかあ！？」

「もちろんや！」

「木乃香、うちは別に気にしないでええんよ。」

「もう姉さま！ 殿なんて呼ばれ方されたら他人を仲良くないみたいで嫌や！姉さまも”せつちゃん”って呼ばれるの！」

「あはは、刹那、楓ちゃん、二人とも諦めるんだな。こうなったら木乃香は諦めないぞ。」

「分かりました。えと、このちゃん……、せつちゃん……」

「うふふ、なあにかえちゃん」

「か、かえちゃん！？」

「そうや、かえでやから”かえちゃん”や！」

「ううう、分かりました。拙者はもうこのちゃんやせつちゃんには敬語は使わないでござる！」

なんでそんな結論に至ったかは分からないがそうするらしい。こつちとしてはもつと仲良くなるためには良い傾向だと思つので放って置くことにする。

「いいのか水葉？」

「ああ、構わないよ。そつちの方がすぐ仲良くなれるだろうし。」

キヤツキヤと騒いでいる3人を見ながら俺は紅葉と話しをする。ちなみに俺たちはすぐに打ち解けた。紅葉はすでにいくつか任務もこなしているのである程度柔軟な考えを持っているようだ。

ちなみに楓ちゃんは初任務らしく、多少緊張しているようだったが  
木乃香にすっかり毒気が抜かれてしまったようだ。

「甲賀流、分身の術!!」

「「わあああ」」

おっと、いつの間にか特技披露が始まっていたようだ。

俺は二人の忍術を見ながら二人との出会いはきつと俺たちの糧になる  
だろうと思った。



忍者さんがやってきた。(後書き)

甲賀の忍者楓さんが麻帆良組を抜けてこちらに入りました。  
加えてオリジナルキャラとして兄の紅葉を追加しました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8392x/>

---

近衛の息子

2011年11月17日19時15分発行